

中谷ミチコ展 アーティストトーク

2019年9月29日(日) 午後2時～午後2時45分

---

はじめまして、中谷ミチコと申します。今日は皆さんいらしていただきましてありがとうございます。作品についてのお話をさせていただこうと思います。よろしくお願いします。

今回の展覧会について、どこから話せばいいかと1週間くらいずっと考えていたのですが、まずは私と柳原義達の作品の出会いについて話したいと思います。私が初めて柳原義達の作品を見たのは、17歳のときでした。あるとき、鎌倉の神奈川県立近代美術館別館で柳原義達のドローイング展を行っていました。17歳の私がどうして見に行ったかという、高校時代、私は美術のコースのある学校に通っていて、そのときの先生が具象彫刻を作る先生だったんですけども、その先生が月1回くらい私たちを美術館へ連れていってくれました。そのひとつが柳原義達のドローイング展でした。ドローイングが沢山あって、それが彫刻家の展覧会なんだとびっくりしまして。女の人が座っているドローイングがあり、木みたいに座っている、座り続けていたら木になってしまったんじゃないかと、私の感覚ですが、そういうドローイングだなと感じました。そこで、「これは彫刻の仕事なんだよ」って言われて、ほーと思って。

その翌年、世田谷美術館で柳原さんが個展をされていました。そのときに見たのが、美術館の円形の展示室に、いま真ん中に展示していますが、《犬の唄》シリーズというのを柳原さんがたくさん作っていて、その連作がところせましと円形に並べられていた記憶があるんですね。私はそこに足を踏み入れて、柳原さんの作品を仰ぎ見て、「なんなんだ！」と思ったんです。なぜかそのときすごく、考え出すと不思議なんです、「これは私だ！」と思ったんです。女の人が立っている彫刻を作りたいという気持ちになったんです。そのまま多摩美術大学の彫刻科に進学するんですが、その体験がずっと4年間、私をとらえていたように思っています。具象彫刻をずっと続け、4年間作っているんですが、具象彫刻というものが自分をとらえて離さなかった。ある種の呪縛という風に今回の展覧会の文章に書きましたが、それが何だったのかというのが今も言葉にはならない、囚われてしまったということがあったと思います。

その後、ドイツに7年間留学する中で今の作風に出会っていくんですが、常にそれが彫刻というものに対して自分のやり方を模索するような7年間だったんです。期せずしてドイツから三重県に帰ってきました。父の実家が三重県にあり、それが空き家になっていたの、夫と一緒にこちらへ越してきたというかたちになります。全くお金のない状態で日本に帰国し、偶然というか必然というか、空き家にいれば敷地もあるし、ここだったら彫刻を作れるんじゃないかと思って三重県に帰ってきました。最初に三重県に帰ってきたとき、とりあえず知り合いもいないので美術館に行こうかと、三重県立美術館に遊びに来たんですけ

れど。そこには柳原義達記念館があり、私はそれ自体を知らなくて、こんなのがあるんだ？というのと、こんなのがまだ残っているんだというのがありました。こんなものって言い方は失礼ですが、とても意外だったというか、こんなところにこんなものが残っているんだという、「再会」というか、それは自分にとって大きなことで。この記念館に足を踏み入れたときに、自分がまたすごく新鮮な気持ちで、呪縛だったものにもう一回再会できたということがありました。近いのでこの何年か、何度もここへ足を運ぶうちに、柳原義達の原型展を見る機会がありました。ブロンズとは全く違う、原型の面白さ、「なま」なものがまだここで展示され続けているということにすごく感動しました。

自分の制作は、別のところで動いていたのですが、2016年にカラスの作品（《あの山にカラスがいる》）が完成しました。これは柳原さんの話とは別に、自分自身が呪縛とかそういうものから逃れるために見つけた作風の中で、粘土で原型をつくったレリーフ状（半立体）のものを石膏で型取りして、その中に黒い樹脂を流し込むという技法で作ったものです。これは他の透明の樹脂のものと技法としては一緒ではあるのですが、樹脂には黒い顔料を混ぜこんで、かたちの深さが表面にあらわれてくる色彩を決定しています。自分の解釈としては、彫刻の情報が一番表面に表出している、一見絵画に見えますが、まぎれもなく彫刻という現象が一番表面に出てきているという作品だと思っています。深くなればなるほど見えなくなり、そのかたち自身が消えていく、彫刻の影、というものです。これが出来あがったときに、私の中で「この作品の前に絶対柳原さんの《道標》を置くべきだ」という妄想にとられました。これは絶対こうあるべきだと思ったので、色々なところでこうあるべきだという話を会った人に言い続けていました。だんだん自分自身にもその気持ちが強くなってくるし、その情報が伝わって行って三重県立美術館の学芸員の方にもお話しして、こうして実現に至りました。

この状態（自分と柳原の作品が同じ空間に展示されている状態）というのはもうすでに考えたときに自分には見えていたというか。絶対的にあるもの、彫刻として完璧なもの、自分には足りていないという、これがあってあれがあるというようなものだと思いますが、たぶん見ていただければわかると思います。柳原の《道標》をとにかく全部、あるだけ貸してくださいと言って、美術館の方が聞いてくださって、しかも台座に固定されているものを全部外してくださいとお願いしました。全部おろして、同じ地平の上に置きたいと思ったのです。それは自分が重力の上に立っているという気持ちも強くあって、こうした展示にしました。置いてみると鴉がざわざわ動き始めるというか。上から鴉の作品を見下ろすことは今までなかったので、新鮮な気持ちで柳原さんの立体造形、粘土の塑造の可能性というものを感じ、敵わない、他の道を見つけなきゃということもすごく感じました。

この展覧会は大きくわけて4つの部屋に分かれています。これに対応するかたちで、すでに出来上がっていたものに対して、反対の部屋をどうしようかと考えたときに、自然光で真っ白な部屋にしようかと最初に決めました。黒い樹脂の作品のある暗い部屋と、明るい部屋を行き来すると目がハレーションをおこします。一瞬見えなくなるような展示構成を作

りたいと考えました。

入ってすぐの部屋は最初に人を迎える場所なので、柳原さんの作品の中で最も少女のような頭部、かわいい印象の作品を選びました。卵を割るようなかたちで自分の作品を左右に配置しました。イメージとしては少女が見ている夢。卵の殻を割った状態というか、そういうイメージで展示しました。

問題は大きな部屋でした。どうにもならなかった。この1年くらい、ずっと手のひらに収まるくらいの小さな作品を作ってきました。広い空間を小さい作品で満たすことが果たして可能なのだろうかと感じたので、設計に入ってもらった大室佑介にこの部屋をどうかかしてくれと頼んで、展示設計をお願いしました。いろいろな案が出ましたが、最終的には、最奥部の開口部と同じ高さで周囲を取り囲む白い壁面を設置する案におさまりました。真ん中に、柳原の《犬の唄》を置きたかったんです。それを取り囲むように自分が作った女の子たちの夢というか、私が一年間作り続けてきた手のひらにおさまるようなサイズの夢のようなこけしのような存在の彫刻を配置して、犬の唄の女性を見つめ続ける空間を作りたいと考えていました。

カラスの部屋の方はすでに決まっていたのに、一年くらい考えても反対側の部屋は決まらないというのは辛い状態でした。それで、私が柳原さんの作品を自分の作品にしてしまおうと。犬の唄の女性像のことを、柳原は「これは私だ」といっているんです。戦時中、柳原は実弟が出兵して亡くなり、自分は召集令状が来たと思ったら終戦が訪れたために何もできなかったという悔しい思いを抱えていたらしいのですが、そういう悔しい気持ちを抱いていたと。

(中略)【犬の唄の来歴について、学芸員の説明】\*「犬の唄」は、普仏戦争時パリで流行したシャンソン「犬の唄」(Chanson de Chien)に由来する。戦争に敗れたフランス人のレジスタンス精神を込めた歌であったという。柳原は、印象派の画家ドガが描いた水彩画を見知っていたらしく、自身の戦争後のやり場のない虚しさや不満、自嘲を作品に託したとされる。

その《犬の唄》の石膏原型を私は展示室の真ん中に配置しました。十代で見たときに「これは私だ」と感じたこと——当時来歴を知っていたかどうか記憶が定かではありませんが——、それを思い返してみると、自分自身を「犬」ととらえていたように思うんです。というのは、戦後、柳原という人が日本の具象彫刻をけん引していきますが、その柳原を先生として教えられてきた人たちが私の先生となって、私に「柳原義達を見よ」と教え込んだわけです。大学時代に具象彫刻と格闘してきたのですが、時代の流れというか、当時、「具象彫刻なんてもう終わっている」と散々言われて。それでも私は捨てきれなくて、絶対にまだ具象彫刻には可能性があるはずだという気持ちを捨てきれなかった。それは呪縛でもあったし、恨みというか、愛憎があるような気がして。それを私のこけしたちが逆にずっと見返す空間というものを作りたいかったというのがあるんじゃないかと思います。この1年く

らい、私はイメージの中で常に犬の唄に囲まれているみたいな状態が続いていて、この間よくよく考えてみたら、「あれ、私が犬の唄を取り囲んでいる」と。展示しているときにはそこまで考えていなかったのですが、私の作品が柳原義達を取り囲んでいるという逆転の場所を作ってしまったんじゃないかと気が付きました。私のそれぞれの作品には小さな物語や日常風景が刻まれています、ここで一番大事だったのは、《犬のお母さん》という作品です。最初、この《犬のお母さん》はありませんでした。しかし、搬入の2週間くらい前に何かおかしいなともやもやし始めて。急ごしらえで、石膏直付けで犬を作り、展示することに決めました。それはたぶん、言葉じゃなくて、自分自身でも彫刻を作らなきゃいけないという直感が働いたのだと思います。

昔から犬が母親になって乳房が膨れて腫れているというのを見て、だらしがないというか痛々しいというか生々しいというか、すごく見てはいけないものを見ているような気がしていました。自分も数年前に子どもを産んで授乳をしているときに、なんだか犬みたいだなということを考えていて。これは犬だなというイメージと今自分が対峙している犬の唄という男性が作った女性の裸体像。柳原義達が、服従しながらも手でお尻をぐつつかんで立ち上がっている女の人の像(犬の唄)を自分自身の姿だと言っている文章がありますが、その思考回路にこの《犬の唄》の女性というのは誰なのか、犬にされてしまった女性、なぜ女性なのか、裸なのか、という思考の穴があるような気がして、「犬にされてしまった」と感じるのには単なる被害妄想なんです、それにどうにかくらいついてやろうと思って作ったのが《犬のお母さん》という彫刻なのか。実は彫刻にならないようにすごく気を遣っていました。かたちで表現しないように作りました。

最後、奥の部屋は私が三重県美の中で一番好きな場所です。なぜだかはわかりませんが、この端っこまで来るとはあーってなるんです(笑)。この部屋はどうしようと最後まで悩んでいたのですが、ここでは柳原さんの《仔山羊》という小さな作品を展示することにしました。柳原さんは37歳のときに火事で大半の作品を焼失されています。いま残っている作品のほとんどはそれ以降に作られた作品だということです。柳原さん自身は、自分が作ってきた作品が火事でほとんど焼けてしまって、喪失感にさいなまれています、後日この《仔山羊》が棚の中からぼろっと、そういえばあったなと見つけてくるんです。この作品を見つけたときに、作品というのはいいか悪いかではなく、残ってなくて意味がないんだということ、残っているから意味があるんだと確かご自身のエッセイか何か書いているんですが、実は私もこの展覧会が始まったときに37歳だったんですね。ということは、この、今まで作ってきた展示というのは、とりあえず一回燃やされるんだ、と。柳原さんの人生に重ねてみれば、という意味で。いままで自分がやってきたことは火に燃やそう、燃やしたとしたらどんな気持ちになるだろうかとずっと考えていて。それはある種、もしかしたら解放を意味するのかもしれない。すべて崩れ落ちるような気持ちと、まだまだこれから始まるんだ、これからだぞという勇気、一から作ればいいのかという勇気を与えてもらえるんじゃないかと。ここには自分が作った、というか捨てられなかった紙粘土の作品を展示しま

した。かたちとしては全く展示するなんてほとんど考えていなくて、一日で作ったんですが、良いか悪いかもよくわからないし、ただそれまでこの個展を見てもらったところで、それがすべて燃やされたとしても、この作品が一点どこかに残っていたらまだまだ作れる、と思った作品を《仔山羊》と一緒に並べることにしました。これで展覧会場を一周したと思います。

何かご質問があれば――

(学芸員)：ここまで、柳原義達との関わりの話が中心になりましたが、例えば、中谷さんがよく制作されるモチーフについて聞かせてください。中谷さんは大人ではなさそうな少女のような女性、鳥、犬、狼、魚など、繰り返し制作されています。逆に言うと、なぜ猫や男性像は作らないの？ということをよく考えているのですが。

自分が重ねられるか、重ねられないかという問題になっていくと思います。自分の中にあわないというか異物感が残ってしまうというか、それで選んでいるというのがあります。一番よく作るのは舟、鳥、魚、少女ですが、舟も魚も鳥も違う重力の中に存在している。舟は海の上だし、魚は水の中だし、鳥は飛んでいる。それを彫刻化するのには、ある種の引きずり下ろす感覚、あるべき場所から自分のいるところへ落とし込む、暴力性もあるし憧れもあるというか。少女を作ることも、どっちつかずの状態、まだ大人か子どもかわからない状態というか、そのどちらにも決められない状態というのは常にポジティブとネガティブという関係、あることとないこと、などのどっちつかずの状態をそのまま体現するものを作品化したという気持ちがあるのだと思います。

Q：鴉の作品について。一番大きな作品だけが壁ではなく立てかけてありますが？

2016年に制作後、初めて展示したときに使用した格子壁です。普通の壁ではなく、向こう側が見えるという状態が重要です。重量の問題もあります。一番大きな作品は100キロあり、単体で立たせることはできません。それをどうにか壁にかけるのではなく自立させて裏側も見えるようにしたいと思い、格子壁を採用しました。

Q：作品の展示位置について。最近の小さな作品は目線よりも高い／低い位置にある。例えば、能面は同じかたちなのに角度によって表情が変化する。中谷さんの場合には展示する高さに狙いがあるのか。ご本人がいないと展示が不可能ではないかと思いました。

全部、自分で展示しています。というのかけづらいということもあるので、自分でかけて調整をしています。その場でやることが多いです。どういう風に見たいか、白い壁の中に

彫刻を浮かべるような気持ちがあります。

Q: 周りに四角い制限のあるかたちから、周りが無いものへ変化していますが。彫刻家というのは周囲の空間と作品が強みなもので、四角いものから周囲を取り払ったものへと移行したときに考えの変化はあったのか。

四角いかたちは、自分がこの技法にたどりついたときに不可欠なものでした。それが込みで、この技法が成り立っていると思っていました。あの支持体がなければ、ネガティブなものは成り立たないと思っていて。今回の小さな作品で、それを切り落とすという発見をしたんです。もういらんんじゃないかと。背面を作り込むことで気配というものをもっと強くなっていくんじゃないかという発見をしました。ああじゃない、こうじゃないとやりながら常に新しい発見をすることが自分の作品に反映されていく、そういう作り方をしているのかと思っています。

彫刻はどこかに置かれなければいけない、という問題は意識しますが、でも、ものを作っているときはその問題よりも、わりとイメージに忠実なかたちを探すぞという気持ちで作っていて。でも結局できたものはどこかに展示される。その空間が違う意味合いを、作られたものに対して与えるんじゃないか、そういうのはすごく邪魔だなんて思ったことがありました。だったら白い平面の中に、と。それで白い紙の中にドローイングを描いて、どうやったら彫刻をドローイングに近づけていけるかなと思ったら、白い壁が必要だったという流れです。白い壁の中なら無限に広がっていける、重力も関係ないし。その場所はどこにもないです。ライティングとか関係ないし。窓の外の景色も自分の作品に影響しないし。真っ白な壁の中に作りたいと。

Q: 今日のお話の中で、自分が授乳しているときに犬みたいだと感じられたと言っていたが、この作品（《犬の唄》）についてはどういう意味があるのですか？

これは実は彫刻家の像です。裸の像は柳原義達の《犬の唄》を模しています。頭は犬になっていて、それをどうにかこうにか立たせようとしている彫刻家がいる。これはセルフポートレートという意味もあります。

Q: 柳原が火事で作品を失って、というエピソードにあわせて展示も考えられたと聞きましたが、中谷さんがもし本当に作品を焼失してしまったとしたら、次は同じ素材で作りは続けますか？あるいは別の方向に行くのでしょうか？

まだ、その喪失感に追いついていないのですが、たぶんまた彫刻を作ると思うし、とりあえずドローイングを描こうと思うと思います。あまり変わらないですけどね、また明日から

の制作と。

Q：他の素材が気になる、とかは？

うーん、次は何がやりたいか、ということですか？

Q：陶芸とか？

なんでもやればいいんだとは思いますが。陶芸も好きです。でも、焼いたものってそれ自体で、ある種私とは全く別の価値になってしまうというか、焼き物という私とは全く別の作品になってしまうと感じられて。それがいまいちピンときていないんです。なぜだろう？やればいいじゃないかと思っていますが。

Q：中谷さんにとってドローイングとはどんなものでしょうか？彫刻では細部のかたちを想像して緻密な作業をされていると思いますが、ドローイングは結構自由な感じなのかなど。自由度などは？

ドローイングは良し悪しを決めないで、描いちゃえばいいじゃないというか。制作の中の位置としては、自分自身が常に呼吸しているみたいな状態にもっていきたいというのがあって。イメージを流し続ける練習というか。描き留めていくことで、それ自体がこの世に生きているということが重要だと思います。彫刻を作るには時間もかかるし、制約もあるし、本当に勇気がいるっていう話を今朝していたんですけど。彫刻を作り始めるのにはだいぶ勇気が要ります。準備も必要です。たぶん3日間くらい寝続けて、もう何もやりたくないと思って寝て、もう寝られないってなって、こんな状態はもう耐えられないってなってやっと勇気が出てきて作り始める、このくらいのパワーが要るんです。ドローイングはそういう葛藤をしないで作れる、呼吸をするみたいに悩まない、それが作品か作品じゃないかは関係ないというありがたい存在です。

(文字起こし、編集：原 舞子 [三重県立美術館])